

ラオスの こども通信

90号
2025年6月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- ラオスと国交を結んで70年という年に ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「結」 ▶ p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

ラオスと国交を結んで70年という年に

事務局長 野口朝夫

1979年夏、ヴィエンチャン

日本はラオスと国交を1955年に結び、今年は国交70周年にあたるという。「ラオスのこども」が活動を始めたのが1982年。国交を結んで3分の2ほどの年月、私たちはラオスでの活動をおこなってきたことになる。

私をはじめラオスを訪問したのは1979年夏。首都ヴィエンチャンは人通りもほとんど無く、木々の緑と空の青さばかりが記憶にある。自由に街をぶらつくことははばかられ、すべて監視されている緊張感に満ちていた。街で目立つのはUNやUNDPなどの青色のロゴを扉に掲げた国連機関の車ばかりだった。

近くの学校を訪ねてみると、教室は暗く床は土間。隙間だらけの壁から外が透けてみえる。子どもたちは教科書を持たず、ノートも一部しか持たない。ほとんど白くなった黒板に先生がチョークで文字を書き、それを子どもたちが復唱、暗記する授業がおこなわれていた。小さな弟妹を背負った子どもたち、子どもを抱っこしながら教える先生、ごく普通の光景だった。地方はもっとひどかったに違いなく、この状況は80年代を通して変わらない。

この教育の困難さを痛く感じたことが、「ラオスの子供に絵本を送る会」を仲間と立ち上げるきっかけとなった。



ヴィエンチャンの町並み、1980年代 アヌサワリー(記念塔)から撮影

「教育の質を高める」ソフトの課題

バブル期に重なる90年代、日本は経済的に余裕ができ、人々も国外に関心を広げ、新聞の国際面が今より充実していた。多くの市民の支えにより郵政省国際ボランティア貯金が立ち上がり、私たちがも支援を受けることで活動の基礎をつくり、「ラオス語図書の出版」「本を届ける活動」「子どもセンター支援」など幅を広げることができた。さらに、外務省やJICAなど日本政府の資金提供を受けるなかで、より長期的な視点を持ちながら事業を進める「国際協力NGO」としての自覚と環境を整えることができた。

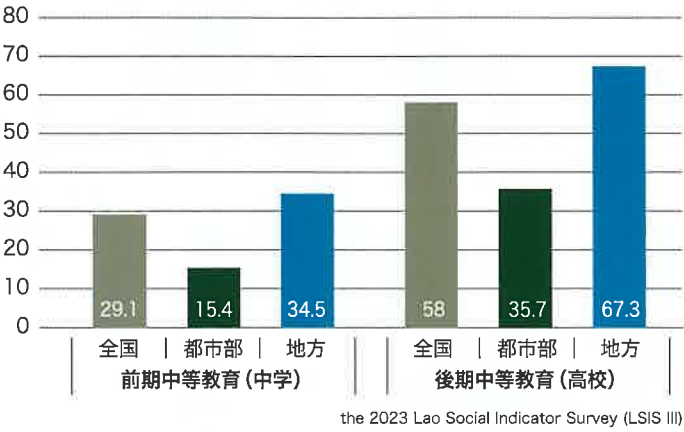


ヴィエンチャンの最初の事務所(1994年ごろ)

少しずつラオスの教育環境(就学率や卒業率など)が良くなったのは、2000年代に入り、国連が定めた「ミレニアム開発目標(MDGs)」により様々な国際機関やNGOが活動を上げられるようになって以降とを感じる。昨今、ラオスには100近くの国際機関や支援組織が入り様々な活動を上げている。その成果もあって子どもたちの教育環境は以前に比べ改善されている。

とはいえ校舎の整備、教科書の改訂など基礎的なインフラ整備が主で、私たちが担うような、多様な図書や教材、学習機会の提供、教員の技術の向上など「教育の質を高める」ソフト部分は、まだ課題が多い。特に、地域による格差は極めて大きい。

都市部と地方で広がる差
ー就学した後、学校に通わなくなる生徒の比率



[グラフの説明]ラオスでは、入学しても様々な理由から途中で学校に通わなくなってしまう児童生徒が多くいる。この20年、中等学校(中学高校)の就学率は上がってきているが、学校に通わなくなる生徒の数がここ10年、上昇している。都市部と地方とで経済格差も一因となって差が広がり、前期中等教育(中学)では、都市部で15.4%、地方で34.5%が学校をやめてしまう。後期中等教育(高校)では、やめる率はさらに高まり、都市部35.7%に対し、地方67.3%と、その差は大きく開いている現状がある。

世界に広がる「人権」の格差を誰が埋めるのか

ラオスの経済は国外からの投資によるバブルもあり、コロナ流行まで高い成長が続いてきた。昨今、都市部では中国をはじめとする外国から入る様々な消費物資が入手できる。この50年で、人々の生活は「お金中心で廻る」ようになり、様々な「当たり前」が変わってきている。人々の関心は近年、「いかにして、家族や私が豊かになるか」ということに集約し、以前にあった「どうしたら、皆が良くなるか?」という視点は弱くなっている。

私たちは、子どもたちはどのような環境にあり、区別なく質のある教育を受け、成長できる環境づくりに協力することを使命に掲げてきた。また活動の担い手は最終的にはその土地の人々によるべきと考えている。しかし、昨今、ラオス社会の変化に伴い、自律的な担い手を探すハードルが上がっているとも感じている。

一方、相対的に経済力が落ちている日本では、国外への関心は下がっている。国際協力活動に関心がある若者や支援者が減少し、多くの団体は資金の調達に頭を痛めている。さらに、財政難が続く日本政府のODA予算の伸びは弱い。加えて自国第一主義は世界的に広がりをみせ、SDGsの掲げる「誰一人取り残さない」という理念がどこまで尊重され続けるか見通せなくなっている。

このような環境において、私たちのような小さなNGO組織が、読書というキーワードにより、子どもたちの人権を守る活動はどこまで続けうのか、意味を持つのか。さらに、現実世界に広がる「人権」の格差を誰が埋めるのか。これまでは当たり前として受け入れられてきた「理念」を、より「自分ごと」とする以外、答えはないかもしれない。

マンスリーサポーター 緊急募集!

経済状況が厳しい中等学校の生徒が、学習を続けられるように支援する奨学金事業を支えるため、マンスリーサポーターを募集しています。現在奨学生は31人。サポートを必要としている生徒はまだ多くいます。皆様のご支援をお待ちしています。

詳しくは
コチラ



はじめる・つながる・つくりだす [2024.12-2025.4]

地域の歴史・文化を掘り起こしカタチに

生徒が自分たちで生まれ育った地域の歴史や文化を調べてそれを記録に残し、図書室資料として地域で活用していくことができたなら…。そんな思いから始まった「地域学習」。おそらくラオスで初めての試みということで、半年かけて準備をし、2～5月にヴィエンチャン県サナカム郡・ムーン郡の中等学校計4校で実施しました。取り組んだテーマは学校によってさまざま。校区の村の歴史を調べて年表にした(各校)ほか、地域に伝わる昔話や伝承を聞き取りして絵本を作ったり(ナムクアン中)、地元の名所を調査して観光ガイドブックを制作したり(バンヴァン中)、それぞれの民族の暮らしをビデオ・写真集にしたり(ナムブーン中)、民族の遊び(ゲーム)をリーフレットにしたり(ムアンムーン中)しました。

活動は3段階に分けて実施。ステップ1で、計画を立て調査を行い、情報を整理し、ステップ2で集めた情報をもとに年表や絵本、ガイドブックなどの成果物を作成。ステップ3で、完成した成果物を披露し、学校の図書資料として登録・活用していきます。



村のお年寄りから地域に伝わる昔話を聞き取り調査

いつ何をするのか計画を立てたり、村人にインタビューしたり、調査した情報をまとめたり…と、自分で考え、グループで協力して行動することが求められます。「今まであまり気にとめていなかった地元のことに興味や関心を持つようになった!」との多くの生徒が答えていました。また、調査や活動に協力して下さった住民の方々からも、「村の若い人たちが地域のことを知るととても良い機会になった」との評価をいただきました。



校区の村の歴史年表が完成!図書室に掲示し活用していきます。(JICA 草の根技術協力事業「中等学校における学校図書室の役割拡充を通じた教育改善事業」)

学校図書室を2県、6校で開設

2024年11月～2025年1月にかけて、学校図書室を中等学校3校、小学校3校で開設しました。学校の在校生数に合わせて、1校あたり500冊～700冊の図書を設置し、合計約1,000人の児童・生徒が日常的に図書を読む機会を提供することができました。

今回開設したのは次の6校です。

ヴィエンチャン県:ポーンホー中学校、ボンシー中学校

カムムワン県:ナノ中学校、チョムトーン小学校、ナーソンブン小学校、パークワイタイ小学校



初めて図書室にやってきた子どもたち。入口でひとつずつカラーチップをカゴに入れます(利用人数の統計をとり、利用が増えると先生のやる気もアップ)。先生も初めてなのでちょっと緊張気味。2025年1月、パークワイタイ小学校 HA362



オープンしたばかりの図書室をさっそく利用する。「その本面白そう!次、読ませて〜」。その本は当会が出版した『カンパーとピーノイ(孤児と小さなお化け)』。どの図書室でも大人気です。たくさんの本の中から、自分の読みたい本を選ぶのはじめてで、みんな嬉しそう。2024年12月、ナノ中学校 HA359 (ご支援:福岡那の香ライオンズクラブ、沖電気工業(株)OKI愛の募金、冬募金書2023、書き損じハガキ回収キャンペーン2023-24)

「ぐりとぐら」募金、書き損じハガキ・未使用切手とともに

ラオス語版『ぐりとぐら』の出版に向けて、2024年秋から特別募金を実施しました。書き損じハガキや未使用切手も多数寄せられ、合わせて155人の方から200万円を超える額が集まりました。誠にありがとうございます。目標額を上回ることができたので、部数を増やして出版する予定です。

『ぐりとぐら』がラオスの子どもたちに届きますように」

「子どもが小さい頃に『ぐりとぐら』を読み聞かせて、優しい表情で子どもが聞き入っていたのを思い出します」

「『ぐりとぐら』が大好きで、同じカステラをつくって!と母を困らせました」

など、応援メッセージや子どもたちの読みだり、読んでもらった思い出もたくさんいただきました。みなさんの想いとともに学校図書室などに届けます。ラオスの子どもたちとのすてきな出合いが実現するでしょう。

京都織物展を開催

3月26日～31日、恒例のラオスの布仕事を紹介するイベントを、京都のギャラリースペース「桜谷町(さくらだにちょう)47」で開催しました。

今回は、2023年にユネスコ無形文化遺産に登録された「ナーガ」文様を紹介しました。「ナーガ(龍)」は、水の神(精霊)として、寺院にも飾られ、織物でも重要なモチーフとなっており、様々な形で織り込まれています。

3月27日の京都新聞に、織物展の情報を載せて頂いたおかげで、朝早くからお越し下さる方もいました。開催期間中は、雨で肌寒い日が続きあいにくの天候でしたが、70人をこえる方々に来場いただきました。



ナーガの文様の織物

ピーマイパーティ(ラオスのお正月)

4月20日(日)、東京都大田区「池上会館」にて、ラオスのお正月をお祝いする「ピーマイパーティ」を開催しました。

今年は日ラオス外交関係樹立70周年ということで、第1部はラオスの歴史を振り返り、当会が実施してきた絵本・紙芝居をはじめ図書の出版や、学校図書室の開設支援など読書推進活動の歩みを紹介しました。

第2部は、伝統儀式「パーシー」の体験とともに、手づくりのラオス料理を楽しんでいただきました。また、研修で来日していたホアンカオ小学校の子どもたちと職員が、読み聞かせや踊りなどを披露してくれました。

参加した方からは「料理が本格的でおいしかった」「こんなにもラオスに関心・関連のある人たちがいると思わなかった」といった声があがりました。



パーシー。白い糸を手首に結んでもらい、また互いに結び合って、幸ある佳き一年を願います。京都織物展とピーマイパーティは「日ラオス外交関係樹立70周年認定事業」の一つとして開催しました。

「ラオスのこども」の仲間たち

ラオスコーヒーという「絆」を通じて

高場和正さん(株式会社すかいらーくホールディングス)



ラオスからコーヒーを輸入し日本で販売する当社は、「ラオスのこども」との協力を通じて、これまで2万冊以上の図書を寄贈しています。

はじまりは2011年に日本が危機に直面した時です。国際的な支援を深く

考えさせられた年でもあり、我々も恩返しをしたいという思いからのスタートでした。地理的にも近いラオスには多くの民族がおり、それぞれが独自の物語や伝統を持つことを知り、子どもたちの読書を奨励したいと考えました。

図書寄贈からスタートして少しずつアップデートし、読み聞かせをできる人財育成や図書室設置にも拡がり、総合的に教育支援ができるようにとの願いに繋がりました。チャンパサック県パクセーの学校で図書室が設置でき、変化をもたらす機会も見出しました。

これまでの支援で開設した図書室で育った世代(ラオス事務所のバンロップさんのような)が成人に達し、その世代が自分たちが受けた絵本教育、折り紙などを発展進化させ次世代へ繋いでいる様子を目にしました。ダンスや子どもたちとの掛け合いをしながら楽しくインプットさせている。支援される側への支援から、支援する側への支援まで到達できていると実感しています。

その中で「折り紙」は「現地化」した教育ツールの一つとして芽吹こうとしていると感じます。幼少期における工程管理を覚える重要な教育ツールとなりえる。ただ、均整とれた紙の自国製造が

あるわけではないため、「折り紙」と「現地語折り方教本」は支援する余地が大いにあるとも感じます。

経済発展したように見える首都ヴィエンチャンでも、貧富の二極化が進み、入学しても卒業せずに家業手伝いに戻っている層が多くなってきていると感じました。今、我々はどんな「教育支援」に繋げることができるか!? 当社としては、若者の教育機会の拡大を目的として「継続性」を考えると、これまでの成果もあり、意欲のある学生が高等教育を受けられる機会を取得する奨学金を提供する取り組みにも発展させていきたいと考えています。

これからも、これまでのパートナーシップの成果確認と本当に必要な支援を見定め、食に携わる我々がラオスコーヒーという「絆」を通じ、世界中が持続可能な発展を遂げていくことを祈念します。

表紙の写真

ナムブーン中等学校の地域学習で。民族のくらしのビデオ・写真集を制作する5年生(日本の高校2年生に相当)。この学校では、海外からの支援で今年度からコンピューターが数台設置されました。グループに分かれて画面とにらめっこしながら、地元の人たちから聞き取った情報を入力したり、撮影したビデオや写真を整理したり…。スマホは慣れっこの生徒たちもPCは初めて。皆でワイワイ格闘していました。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 90号

2025年6月発行 代表:チャントソン・インタヴォン 編集人:森透
発行: Action with Lao Children / Deknoylao
(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alctk@deknoylao.net
<https://deknoylao.net>
都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494



メコンのほとり 結

ラオスの結婚式

今年3月に結婚式を挙げたラオス事務所スタッフのティンさんが結婚式の様子をおしえてくれました。

ラオスは婿入り婚。花婿は親戚と花嫁宅に向かいます。

家の前では金のベルトと銀のベルトを持った花嫁側の親戚が花婿を「通せんば」して迎えます。無事に家に入れてもらい、バーシースークワンという伝統儀式をおこないます。その儀式と



は、半分に割ったゆで卵を、花嫁と花婿が相手の口に入れて一緒に食べて、夫婦の契りを結びます。長老、両親、親戚たちが新郎新婦の手首に木綿の糸を巻いて幸運をお祈りします。

夜は披露宴。都市部ではホテルや式場も人気ですが、郊外では、学校の校庭を使うことがよくあります。テントを張り、机と椅子を並べて、たくさんの料理を用意します。来賓は500人～600人で、普通の規模。夜遅くまで宴席が続きます。多くの人が関わり、盛大に行われる結婚式は、人と人の繋がりを大事にするラオス文化を象徴しているように思います。

ティンさんおめでとう!